

《第 498 回(2023 年 1 月 12 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:9人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『コーヒーを飲んで学校を建てよう キリマンジャロ・フェアトレードの村をたずねる』

ふしはら のじこ/文・絵, 辻村 英之/監修 実生社

1 月の読書会では、日本へコーヒー豆をフェアトレードしている、タンザニアのルカニ村を訪ねる絵本を読みました。コーヒー豆の栽培のほか、ルカニ村での生活や、フェアトレードで村がどう変わったのかも、色鮮やかな絵とともに詳しく紹介されています。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●フェアトレードのコーヒーを扱っている友達がいるが、こういうことだったのかと分かった。判断を誤らないリーダーがいる、ルカニ村の人々はかっこいい。「教育は社会(政治)を作らない、教育は経済を支える」と聞いたことがある。経済の大切さを感じた。公正な取引をすることで、お互いが豊かになると思う。

●おもしろく、楽しく読んだ。コーヒーが栽培される姿が丁寧に描かれている。甘いバナナしか知らないの、バナナが主食ということも驚きだった。現地の暮らしを知ること、フェアトレードにも関心が向く。コーヒーを飲むことが森林保全にもつながるし、今も続いていることがすばらしい。

●森林保全もしながらコーヒーを作っているの、たくさんは作られていない。そのため、自分たちの身近になく、手に取る機会が少ない。だが、この絵本がそれを身近に感じさせてくれた。こどもが読む本文と大人用の解説があり、親子で読める良い本。流行りにするのではなく、続けていくことが大切。

●村の暮らしが戦後の暮らしと重なった。コーヒーなどを栽培する姿も日本の農業とつながって、共感できた。色彩の明るい絵がとても良かった。描かれている人たちが、とても誠実で、自分たちがどうすればよいかを自分たちで考えている。フェアトレードで学校が建てられることを知り、自分の希望を託せると思った。

●コーヒーの国際価格が下がり、教育が受けられなくなったとき、日本人が関わったフェアトレードで教育が守られた。フェアトレードの大切さを感じた。森を壊さず、コーヒーの木の特性を知って植えられている栽培方法が素晴らしい。生産地を守り、生産者の生活を守るフェアトレードのことが具体的に書かれていて、理解しやすかった。

●親子で一緒に読める、いい絵本。こどもたちも受け止められる内容だと思う。こどもの教育が村の希望になっているところも応援できる。自分たちの食べ物は、世界とつながっている。絵本の最後にフェアトレードのコーヒーが買えるところも紹介されており、この絵本を通して、自分にできることをしたいと思った。

●色彩がきれいな絵本で、同じ赤色でもコーヒーの赤は南天の赤とは違うと感じた。着ている服も鮮やかで、文と絵が楽しい。学校を1年生の教室から少しずつ建てたりと、日本とは違う経済感覚だと思った。前向きに、少しずつ良くしていこうという考え方がよい。主食ではなく、嗜好品のコーヒーを扱っているところもいいと思った。

●絵がきれいで、ほのぼのとした。フェアトレードで学校も建ち、明るさがよい。こどもたちの制服が国旗なのもかっこいい。男性産物、女性産物という考え方や、コーヒーができあがるまでに手間がかかることもよく分かった。個人的には安いものを買ってしまうが、それもどこかの国で安い賃金で働いている結果だと考えさせられた。

●コーヒーは日光が苦手なことや、コーヒーの価格が国際価格で決まってしまうことなど、知らないことがたくさんあった。こども向けにフェアトレードやエシカル消費などを説明した本もあるが、それとこの本を併せて読むと、具体的なことが分かってよいと思った。自分にできることをしたいと思った。

次回 2 月 9 日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『目で見ることばで話をさせて』

アン・クレア・レゾット/作, 横山 和江/訳 岩波書店

※申込み・参加費は不要です。